

冥土喫茶

作 佐藤喜久子

登場人物

幸子	「喫茶若草」店主	長女	八十三歳
雪子	次女		七五歳
妙子	三女		七三歳
加奈子	若草学園の後輩		五十歳
律子	近隣のがん患者		八十二歳
上川路	開業医		八六歳
原田	近隣の住民		七五歳

クリスマスが過ぎた年の瀬のある日。

東京近郊にある架空の街。『桜の園』駅から長い時間バスに乗って『かもめが丘』の停留所を降りる。町はかつては若者が結婚して子供を育てた町であったが、今は子供の声も聞こえず、空家が並んでいる。ガーデニングの盛んだった頃の名残の庭は雑草が生え、空き地の大木は強風で倒れるのを縄に縛られて踏ん張っている。迷路のような道を歩いていくと周りとは場違いなほど派手な若草色に塗られた外観の家にぶつかる。玄関の脇に『喫茶若草』の看板。『一度覗いてみてください。おしゃべりしませんか？ あなたが一番楽しかった頃に帰ろう。』

舞台は喫茶店の中。花柄のカーテン。中央にオープンキッチン。キッチンの前に大きなテーブル。花柄のテーブルクロス。メルヘンチックな置物や人形。テーブルを囲んでさまざまな形の椅子が並べられている。手作りらしいクッション。部屋の隅に大きなソファ。上手が玄関。下手はトイレ、二階への階段に通じている。壁の一部に十数枚の老人の笑顔の写真がはられている。柱時計があ

るが、客席からは見えない。

十

眼鏡をかけたセーラー服の雪子がストープの上のぜんざいをかきまわしている。セーラー服の幸子がちらし寿司を作っている。

時計が二時を打つ。

すみれの花咲くころはじめて君を知りぬ

雪子

君を想い日ごと夜ごと悩みしあの日のころ

雪子

すみれの花さくころ、今も心ふるう

雪子

忘れな君 われらの恋 すみれの花咲く頃

雪子

忘れな君 われらの恋

雪子

すみれの花咲くころ（声はりあげる）

雪子

雪ちゃんも歌ったら。

雪子

毎日腹式呼吸しなくちゃ。

雪子

今はすみれの花の気分じゃないの。遅いわね。東京駅から電話あつて

雪子

干びようとシイタケと人参は炊いたんだけど、雪ちゃん、レンコン

の甘酢つけを作ってくれない？ この頃、なんだか舌に自信がないの。

それと錦糸卵もお願い。

雪子

なんで私が？

雪子

二か月ぶりに妙ちゃんが帰ってくるのよ。

雪子

ミツカンのチラシ寿司の素があるでしょう。

雪子

妙ちゃんは我が家のチラシが寿司好きなの。

雪子

今は便利なものがあるのよ。

雪子

ひとつひとつ丁寧に煮て。チラシ寿司にはそれぞれの家の味があるっ

雪子

妙ちゃんが帰ってくるだけでも大変なのに大変を掛け算することはな

幸子
いでしよう。

掛け算って何？

雪子
分つてよ。毎日、毎日、家事も掃除も『喫茶若草』のお仕事も全部私がしてるのよ。昔のように何でもかんでもできないの。自分でもいやになるわ。お姉ちゃん、お願いだからこれ以上、私のお仕事増やさないでね。

幸子
雪ちゃん、最近怒ってばかり、どっか具合が悪いの？

雪子
いいえ、お構いなく。お米は？

幸子
お米はだいじょうぶよ。昨日、配達があったわ。

雪子
チラシ寿司作るんだったら、ご飯が先でしょう。洗ってざるに上げて、三十分おいてたくのよ。

幸子
そうね、そうだったわね。

雪子
余計なことするのに大事な事忘れて。

幸子
最近、なんだかぼーっとして、年ね。

雪子
ここでは年のせいだと言わない約束でしょう。年は取っても心は若い、それがお姉ちゃんのモットーでしょう。変更するの、しないの？ するなら どうぞ、ご自由に。

幸子
そうポンポン言わなくても。雪ちゃんがポンポン言うから、私の頭がポンポンになるの。

雪子
頭がポンポンって、分らない。

幸子
昔、あったじゃない。夜店で売っていた。お米ポンポンあったため、軽い軽なお菓子。お米の中身に空気が入って軽く軽くなるの。

雪子
そうね。お姉ちゃんの頭も軽く軽くなるのね。

幸子
雪ちゃん、あなた最近言うことがきつい。ママが生きていらしたら、本当に悲しむわ。

雪子
ママは私の年にはとっくに死んでいましたよ。

幸子
ママは最後まで立派だったわ。

加奈子が黒いマント姿で長い傘と旅行鞆と『喫茶若草』の看板をもつて入ってくる。

幸子と雪子は気が付かない。

幸子
雪ちゃん、私もママの娘。立派に生きて見せるわ。

雪子
お姉ちゃんは言うことはご立派なんだから。これからは人を頼らないで立派に生きてください。

幸子
ええ、妹に馬鹿にされないように立派に生きて死んで見せますわ。

雪子 レンコンはどうするの？

加奈子 これ、外の看板、風で隣の空き地まで飛んでいました。「喫茶。一度覗いてみてください。おしゃべりしませんか？ あなたの一番楽しかった頃に帰ろう」この看板ですよね。

幸子、雪子、加奈子を見る。

加奈子 すみません。チャイム、壊れているみたいで、入ってきました。

雪子 ありがとう。看板、また落ちたのね。そこに置いておいてくださいな。

加奈子 ここでいいですか？

加奈子、看板を部屋の隅に置く。

幸子 ここはチャイムはないの。喫茶店ですから。あなた、……魔女？

加奈子 あの、ここは『喫茶若草』ですね。若草学園の卒業生、三人姉妹が開いていらつしやる。

雪子 あなた、お電話くださった方？ 同窓会の求人案内をご覧になって。

加奈子 すいません。遅くなって。

幸子 お帰りなさい。

加奈子 えっ？

雪子 お帰りなさい。

加奈子 そうでした。ここは、いつでも「お帰りなさい」なんですよねえ。

幸子 お帰りなさい。

加奈子 ください。私、酒井加奈子、九十四回生です。よろしくお願ひします。

雪子 お電話下さってから時間がたつので心配しましたの。

加奈子 すみません。迷って迷って、お電話したんですが、お話し中で。

幸子 変ね。雪ちゃん電話していたの？

雪子 私はずっとおぜんざいの鍋、かきまわしていました。お姉ちゃん、また受話器もどしてない。さつき電話してたでしょう。

雪子、立ち上がって電話の受話器を直す。

幸子 間違い電話多いのよ。

加奈子 懐かしい。まだ黒電話。たくさんの写真。

幸子 みんなここのお客様だった方たち。ここを気にいって毎日通ってくださった方達。

加奈子 あら、これは古い写真。これだけ、『喫茶若草』で撮った写真じゃないんですね。

幸子 陽子さんとおっしゃるの。ここができる前の大切なお友達。

加奈子 向日葵みたいな笑顔の方ですね。

幸子 二人でお弁当持って高尾山に行った時の写真。二人とも高尾山は初めてだったの。

電話のコール。

幸子、とる。

幸子 喫茶若草でございます。えっ、おばあちゃん？ わたくしはどなたからもおばあちゃんと呼ばれておりません。

雪子、電話を切る。

雪子 おれおれ電話も多いのよ。あなた、同窓会誌の取材でいらした事あったのよね。

加奈子 はい。取材の時は世話になりました。

雪子 同窓会誌にのせていただいて、おかげ様であれからたくさんの方がお見えになったのよ。

幸子 全国の同級生からお手紙いただいたの。ほら、雪ちゃん、あの時のお手紙の箱どこにしまったかしら。

幸子、部屋の中を探す。

雪子 ごめんなさい。寒かったですでしょう。コートを脱いで火のそばで温まってくださいな。お座りになって。お茶を入れますわ。

加奈子、コートを脱いても全身真っ黒。ストーブに手をかざす。

加奈子 あれから、二十年です。

雪子 私たちすっかりおばあちゃんになったはずね。

加奈子 お若いですわ。

雪子 気持ちは若いつもりなの。

加奈子 三人姉妹の若草学園の卒業生が地域のご高齢の方のために自宅を改装して喫茶店を始められた。それもボランティアで。若草学園の卒業生

の活躍を載せるコーナーは皆楽しみにしていたんですよ。

雪子 あなた、ずっとあれから同総会館のお手伝いしていらっしやるの？

加奈子 いいえ、結婚して。子供が二人できましたので。

雪子 お留守にして、大丈夫なの？

加奈子 先輩にお会いしたくて、子供ももう大きいし。私も将来こういうお店をしたいなあって思っているんです。

手紙の箱を探していた幸子が箱を見つける。

幸子 ほら、ここにあった。

幸子、手紙を読む。

幸子様、久しくお会いしていませんが、お元気で過ごして下さる様子が、うれしく拝見いたしました。ご結婚以来、関東にお移りになって同窓会でもお会いできず寂しく思っておりました。昔、あなたのお家にお伺いしてお庭でおいしいお茶とお母様の手作りのシュークリームをいただいたこと、懐かしく思い出します。

雪子 お姉ちゃん、お手紙は後で。

幸子 ここからがいいのよ。あなたがご主人を亡くされたのに強いお心で新しい活動をお始めになったこと感動いたしました。愛を学んだ若草学園の同窓生として誇りに思います。いつか、あなたのお店にお伺いして再会できることを神様に祈っています。主の恵みがあなたにあることを。

幸子、涙をふく。

幸子 ごめんなさい。同級生を思い出すと涙が出るの。懐かしい若草学園。

幸子、また、手紙を読みだす。

幸子 この方は阪神大震災で亡くなったのよ。

雪子 お姉ちゃん、それは後で。

加奈子 妹さんがいらっしやいましたわね。

幸子 それが、今日、帰ってくるの。

雪子 気ままな子だね。あちこち海外を旅して。でも、ここの費用はみんな

妹が出してくれるのでありがたいですけれど。

加奈子 海外をあちこち。夢みたい。

幸子 それが、あの子もいろいろ苦勞して。本当に苦勞したのよ。最初の旦那さんが。

雪子 お姉ちゃん、その話は後で。

加奈子 あの、『喫茶若草』ではみんな若草学園の制服着るんですか？

幸子 ここでは自分が一番好きだった頃の服を着ましようってことにしたのよ。

加奈子 それがセーラー服。

幸子 幸せだった頃でしょう。

雪子 楽しかった頃でしょう。

加奈子 それが、セーラー服ですか？

幸子 加奈子さんはいつかしら？

加奈子 さあ、幸せだった頃、考えたこともなかった。

雪子 そうね。お若いんだもの。

加奈子 若くないですよ。このあたり、変わりましたねえ。『桜の園』駅で降りて、バスに乗って『かもめが丘』で降りたのですが、道を聞こうにも誰も歩いていない、空家が多いんですね。

雪子 昔はね、子供がたくさん道で遊んでいたのよ。子供が成長して都心に引っ越してしまうともう新しい家族はこの町には来なくなっただんな人が少なくなっただ。

幸子 過疎の町。忘れられた町。

雪子 哀しい町、老いていく町。

幸子 寂しい町。捨てられた町。

雪子 疲れた町。眠る町。疼く町。

加奈子 怒りの町。狂っていく町。消えていく町。

雪子 加奈子さん、言い過ぎ。

加奈子 すみません。

ドアのあく音。

上川路が入ってくる。

幸子 先生、お久しぶりです。お帰りなさい。

雪子 お帰りなさい、上川路先生。

上川路 やあやあ、みなさまお揃いですね。いい匂いですな。良い匂いに誘われて来てしまいました。

幸子 先生は本当は私たちに会いに来てくださったんでしょう。

上川路 ここは若い頃にタイムスリップできる所。上川路達也は「青山脈」の女学生に会いにきました。

雪子 先生、おぜんざいのお餅を焼きますわ。おいくつ？

上川路 一つ、いや二ついただきたい。

上川路、コートを脱ぐと学生服。慣れた手つきでコートを掛けると、椅子に座る。

上川路 こちらの若い方は初めてお目にかかりますな。

幸子 先生、この方、『喫茶若草』の救世主。若草学園の後輩ですの。神戸から私たちの仕事を手伝いに来てくださいましたの。神様のお導きですわ。

加奈子 酒井加奈子です。若くはありませんけど。

上川路 いえいえ、お若い。若草学園の卒業生ですか。それは強力な助っ人参上ですな。

雪子 こちらは上川路先生、「かもめが丘」のバス亭の近くの「かもめが丘」クリニックの先生。

加奈子 いつまで、診察してはったんですか？（関西なまりで）

上川路 はい。ぼつぼつですがまだ続けております。（笑う）幸い、パソコンができましたので。今はパソコンでカルテを書かなくてはならないのですよ。

雪子 パソコンができなくて、駅の神山先生も桜クリニックも閉院しましたわね。

幸子 先生、私が死ぬ時看取ってくださいね。

上川路 それは無理ですよ。（笑う）私の方が幸子さんより三歳も上だ。

加奈子 すみません。ここで、ここで私、何をすればいいのでしょうか？

雪子 私たちはここにいらっしやるお年寄りに少しでも楽しい気持ちになっていただきたいの。最近は随分いらっしやる方も少なくなっちゃいましたけれど。

幸子 ここは憩の場所。

加奈子 デイサービスがありますよね。

雪子 車で集められて、デイサービスに行つて、幼稚園ごっこするのがいやなシルバーもいるのよ。

幸子 童謡歌つて。お遊戯するの。いい年して。私は嫌よ。

雪子 ここでは自分の好きな時代に戻つて、お茶を飲んだりおしゃべりする

の。

加奈子 それで私は何をしたらいいんでしょう？

雪子 お掃除、台所、買い物。買い物は生協の配達があるんだけど。ちょっと足りないもの買ってきていただいたり。

加奈子 お掃除と買い物ですね。

雪子 お手伝いの方が急に引越しなさって困っていたの。若草学園の同窓

生なら、私たちの気持ちもよくわかってくださると思つて求人広告だしたのよ。まさか、神戸から来てくださるなんて。

雪子 私たち神様に守られているのね。

加奈子 よろしくお願いします。

雪子がぜんざいとお茶を上川路と加奈子に配る。

雪子 加奈子さんもどうぞ。

加奈子 お手伝いします。

雪子 今日はゆっくりなさつて。長い旅をなさつていらつしやっただから。

雪子 先生、妙子が今日ドバイから帰ってきますの。

雪子 洋菓子は食べあきたでしょうからおぜんざいを作りましたの。

雪子 私はチラシ寿司を作っていますの。

上川路 それはそれは、楽しみです。妙子さんがいらつしやるとパツと花が咲く。

雪子 どうしてああテンションが高いのでしょうか。先生、高血圧のせいでしょうか？ なんだか、心配で、あの子の二番目の旦那さんのように脳

溢血でぱつと倒れるんじゃないかと。

雪子 あの子は小さい頃から変わらないわよ。

上川路 血圧でテンションが高いと思いませんか？

雪子 先生、原田さんいかがですか？

上川路 原田君はだいぶ元気になりました。

雪子 よかった。いったい何であんな事をしたんでしょう。何か話してくださいましたか？

上川路 さあ、自分の人生に絶望した。なんだか、そんなことを言っておりませんが詳しくは。

雪子 雪ちゃん、あなた原田さんとよくお話ししていたので何か聞いていないの？

雪子 私が原田さんの自殺の原因を知っている訳ないでしょう。

上川路 まあ、一時的な気の迷いでしょうな。

幸子 息子さん達も寄り付かないみたいだし。

加奈子 自殺って、お薬ですか？

上川路 飲まないで食べないで三日過ぎして、苦しくて私に電話してきました。三日も。

上川路 私が末期がんの友人が死を決意して水も飲まないで死んだ話を以前した

ことがありましてな。その時、原田君が私も時がきたら、そのような潔ぎ良い死に方をしたいと言ったことがあったんですが、うかつでした。

雪子 馬鹿ですよ。

加奈子 先生、何日飲まない、食べないと死ねるのですか？

上川路 さまざまですね。体力によって違うでしょう。

加奈子 老衰で死が近い時は苦しくないんですか？

上川路 老衰で食べられない、飲めないのは神様が苦痛のないようにしてくださっているのではないかと思います。

加奈子 自然に眠るように死ねるんですか？

幸子 そんなお話はもうやめましょう。加奈子ちゃんには早いわよ。

雪子 先生「源氏物語」は読みあげられましたか？

上川路 はい。やはり素晴らしい。私は宇治十条が一番好きですな。

雪子 軍医養成でお医者様になられたけれど、上川路先生は文学希望だったのよ。

幸子 先生はダンテの神曲も夏目漱石も源氏物語も原文でお読みになるの。

加奈子 原文ですか、すごいですね。

上川路 最近『ボケないための本』を読んでいます。

加奈子 知ってます。ほうれん草を食べるとぼけないとか。(笑う)

上川路 今回、あらためて読んでわかったのですが源氏の正妻の葵の上が出産した時源氏の恋人の六条御息所のたたりで出産後死にますが、葵の上は妊娠中毒だったのではないかと思うのです。現代の医学では助かったでしょうな。

加奈子 現代の医学では死にたくても死ねないんです。

幸子 加奈子ちゃんは死にたいわけじゃないでしょうね。

加奈子 私じゃないんです。

オペラのアリアが聞こえる。「魔笛」の夜の女王の歌。

毛皮を着た妙子が入ってくる。手には旅行鞆。

続く